

第6回新潟出版文化賞



○新潟出版文化賞の概要・・・・・・・・・・・・・・・・	1
○第6回新潟出版文化賞受賞作品紹介・・・・・・・・	2
○講評「第6回新潟出版文化賞 選考を終えて」・・・	4
選考委員長	新井 満
選考委員（記録誌部門）	池田 哲夫
	稲川 明雄
	大田 朋子
（文芸部門）	佐藤 和正
	本間 由美子
	若月 忠信

新潟出版文化賞の概要

1 趣旨

新潟出版文化賞は、新潟県在住者の執筆した自費出版図書に光を当て広く紹介することを目的に、平成11年から隔年で募集を行い、優れた作品を顕彰している全国でも珍しい文学賞です。

2 募集部門

- ・ 記録誌部門（自分史、地域史、民俗記録、郷土史、人物伝、旅行記等）
- ・ 文芸部門（小説、エッセイ、童話、詩集、歌集、句集、絵本等）

3 応募数

第6回新潟出版文化賞の応募数は、記録誌部門が85作品、文芸部門が74作品。合計で159作品の募集がありました。第1回から第6回までの応募総数は900作品です。

4 審査基準

- ・ 地域の文化振興に寄与すると認められること
 - ・ 商業出版にない自費出版ならではの質を備えていること
 - ・ 独創性に富んでいること
 - ・ 記録誌部門においては着実な調査を踏まえ、自己の出版物としてまとめていること
- 以上の4点を審査基準とし、なかでも「地域性」と「独自性」を重視しながら、新潟県の「文化の宝もの」にふさわしい作品を選考します。

5 第6回新潟出版文化賞 選考委員（順不同、敬称略）

- ・ 委員長 新井 満（作家）
- ・ 記録誌部門 池田 哲夫（新潟大学教授）
稲川 明雄（河井継之助記念館館長）
大田 朋子（エッセイスト）
- ・ 文芸部門 佐藤 和正（知足美術館副館長）
本間由美子（フリーライター）
若月 忠信（文芸評論家）

第6回新潟出版文化賞受賞作品紹介

大 賞

芸者から、名歌手へ 小唄勝太郎の生涯 (児玉義男、新潟市)

みなと町新潟市の花柳界で活躍した歌手小唄勝太郎の波乱に満ちた生涯を、プロマイドや唄とことばで綴る筆者渾身の力作。原稿用紙に手書きの文字に筆者の熱い思いが伝わる。

選考委員特別賞 (新井満賞)

行商マンが行く 一車いすで町に出る一 (乙川正純、新潟市)

障害者用専用トイレの使いづらさ。優しさという名の差別。重度脳性マヒの著者が“重たい”日々を大上段に構えず、障害者である前に一人の人間でありたい、という叫びをパワフルに描いていて、読む人の心を捉えて離さない。

優 秀 賞

小説集 松籟 (志田憲弘、柏崎市)

この人の作家としての力量は、井伏鱒二らとの交流、県芸術祭賞受賞等によって、十分に証明されている。それよりも、本の成立過程に強く引かれた。文学の同志と強い影響を受けた教え子と夫人へ亡夫への想いが、典雅な文学の実を結ばせた。「たらふくのんで」、私は美酒に酔わされた。

中越大震災復興記念 「中野俣集落誌」 ～災害を越えて伝えるふるさと～

(中野俣集落誌編集委員会、長岡市)

学校の文集には思い出がある。ふるさとに思い出を持とうという試みは、地震を機に実施された。禍から学ぶことがあると教えられたこの書は、人間の進歩につながると思う。

食は新潟にあり (本間伸夫、新潟市)

本書は、ズバリ食生活の知恵袋。新潟の食文化を再発見させる好著である。伝統食や、新たに生み出された新潟の食文化の豊かさに驚く。

じょんのびよもやま日記 (小林康生、柏崎市)

じょんのびの里、高柳の風景が浮かんでくる文章、さし絵の温かさ、高柳で生まれ育った楮(こうぞ)による生紙の和綴じ本、三者が一体となって素敵な作品となっている。「郷土性」が突出しての受賞である。

記録誌部門賞

父と母の開拓団「五福堂」引揚記 ー無名の民草として生きてー

(残熊てるよ、新潟市)

新潟県出身の満州開拓団の悲劇をあらためて認識させられた好作品。実直な父母の生き様。その記録をみて若者は逃避行のなかで生まれたことを知る。父母への感謝の書だ。

故里つばき 佐渡椿村落史 (萩野よしゆき、佐渡市)

「地域を語るには地域を知ることである」、著書のそんな思いが伝わってくる。地域の史料をもとに書き綴られた本書は、個性的な村落史となっている。

糸魚川山里の文化と地域のあゆみ ー山村における農耕形体と居住環境を軸にー

(松澤静雄、新潟市)

人生の軌跡とふるさとの歴史が重なっているとすれば、50年かかって調べあげたこの書の価値は高い。従来郷土史的な土台も織りこみながらの斬新な視点が重厚にしている。

新潟の地震 (新潟県高等学校教育研究会理科部会 新潟の地震編集委員会、新潟市)

県内高校理科教員が新潟で起きた過去から現在までの地震について中越地震発生直後から執筆・編集した一冊。科学的見地にとどまらず、歴史的・人文的視点での解説は興味深い。

文芸部門賞

賀茂の半月 (小川龍、阿賀町)

美貌の官女の生涯が江戸初期の<時代>を細かく背景に織り交ぜながら描かれている。書き込まれたストーリーは面白く、何よりも著者自身が楽しんで書いているのが伝わってきた。正攻法で取り組んだ力作である。

竹やぶ 四号 ー古希記念号ー (竹内英三郎、上越市)

季節の推移を通底音のようにして、医師である作者の日常が、過去、未来とゆるやかに呼応しながら語られている好エッセイ。選者は、エッセイを選ぶならこれだとメモしていた本。文中の写真、絵も自然体だ。五号を、心静かに待っている読者も、大勢いよう。

動物たちのかくれんぼ (阿部汐里、小千谷市)

出版文化賞も6回目。隔年の開催だから、10年は経つ。こんな絵本が小さな奨励賞になってもいいなと思っていた。故人の十三回忌に連れ合いが、孫の汐里さんに追悼記念でつくらせたもの。小体の絵本だけど、絵も文も、書き加えられた詩も、写真もみんないい。癒し本の逸品だ。

しゅちゅう
酒虫 (齋藤達也、新潟市)

朝に夕に一斗の酒を呑むという「酒虫」にスポットライトを当てた着眼点と、今年話題の大河ドラマをさりげなくからめた構成力はうまい。次の作品にも期待したいと思う。

講評 「第6回新潟出版文化賞 選考を終えて」

新井 満（作家）選考委員長

新潟県が主催する新潟出版文化賞は、1999年から1年おきに行われてきました。本年で6回目ということになります。6回も回を重ねると、気になるのはやはり応募作品数の変化です。ちょっと振り返ってみますと、

第1回（1999年） 82点

第2回（2001年）145点

第3回（2003年）148点

第4回（2005年）208点

第5回（2007年）158点

第6回（2009年）159点

ということになります。本年も100作品以上の応募がありました。この数字が多いのか、少ないのか、考えてみましょう。

出版の形態には、二種類があります。一つは商業出版、もう一つは自費出版です。商業出版の目的は、利益の追求にあります。自費出版の場合は、そうではありません。利益を期待できないことは先刻承知で、あえて出版する。やむにやまれぬ理由で出版することが多いようです。

本賞は、どちらかといえば地味で初版部数も少ない自費出版物ばかりを応募しています。全国的にもきわめて珍しい文学コンクールとあって良いでしょう。そのようなコンクールに100作品以上の応募があるというのは、おどろくべきことなのです。新潟県の文化度がいかに高いかが、よくわかります。新潟県民は、本賞が存在することを大いに誇っても良いと私は思います。

さてこのたびは、数次にわたるきびしい選考をくぐりぬけて、最終選考会に辿りついた作品は、文芸部門が7作品、記録誌部門が7作品。合計14作品でした。会の冒頭、私はこのたびも、応募要項に明記されている4つの審査基準を読み上げ、中でもとりわけ、

①内容にオリジナリティはあるか？

②新潟県というローカルティはあるか？

以上2つが重要であるというお話をいたしました。選考の結果、大賞に『芸者から、名歌手へ 小唄勝太郎の生涯』（児玉義男）が決まりました。前回にひきつづき今回も記録誌部門からの選出です。

新潟市出身の小唄勝太郎は、「島の娘」の大ヒットによっていちやく国民的歌手となりました。しかし時の流れと共に、しだいに忘れられ、今ではその名を知る人も少なくなりました。本書は、埋もれつつある郷土出身の人物に、愛情あふれるスポットライトを当て

ることによって一書を成した労作です。

「面白い人物伝である…」

「勝太郎再評価のきっかけになるかもしれない…」

選考委員全員の賛同を得て、本書は堂々たる大賞受賞となりました。おめでとうございます。

次に、文芸部門の『行商マンが行く一車いすで町に出る一』（乙川正純）について。

選考会の席上、複数の委員から「この作品を“選考委員特別賞（新井満賞）”にしてはどうか…」という提案があり、私も賛成しました。障害をもつ人物が一人で生活し、車いすで行商しながら自立してゆく様子がていねいに描かれています。

著者の乙川さんは、1999年、第1回新潟出版文化賞に『先生 話しに来たよ』で応募され、見事、奨励賞を受賞された方でもあります。あれから10年の歳月が流れました。本書によって、乙川さんのたくましい成長ぶりを知り、感慨深いものを感じました。

なお、優秀賞として記録誌部門から次の2作品が選ばれました。『中越大震災復興記念「中野俣集落誌」～災害を越えて伝えるふるさと～』（中野俣集落誌編集委員会）、『食は新潟にあり』（本間伸夫）

また文芸部門からも次の2作品が優秀賞に選ばれました。『小説集 松籟』（志田憲弘）、『じよんのびよもやま日記』（小林康生）

皆さん、まことにありがとうございました。

池田 哲夫（新潟大学教授） 記録誌部門選考委員

初回から本賞の記録誌部門にかかわらせていただいておりますが、毎回作品に序列をつけることに大きな戸惑いを感じています。

応募作品すべての行間に、著者の渾身の思いが満ちあふれていて、一冊読み終わるごとに深い感慨を覚えるのは当然ですが、ここまで仕上げられるまでのご苦勞に思いをめぐらすと、目頭が熱くなってきます。

選考委員合議のうえで、一応形式的に序列はついておりますが、作品すべてに甲乙付けがたいというのが本音です。とにかく、一書にまとめあげるといふ行為そのものが、すでにたいへんな努力賞だと思います。

とくに今回は、満州開拓団に関する作品が多数ありました。その作品からは、辛酸をなめた方々やその関係者の、「今伝えなければ」という思いが切々と伝わってきました。貴重な体験記は、電子媒体からでは絶対に伝わらない、本という文字媒体のもつ強みだとも感じました。

地域史の応募も多数ありましたが、それぞれに「地域を探り、伝える」ことへの強い情

熱を感じました。私は、日本を語るためには、まず地域のことを知ることが重要だと思っています。地域を語れないものに日本は語れないと思っています。とくに地域では、伝承者の減少にともない、伝承そのものが急激に希薄になりつつあります。そうした意味でも、後世へのたいへんな贈り物を与えてくださったと感激して拝読しました。

応募作品は、夏の間に一冊一冊読ませていただきましたが、力作の数々に、いつのまにか夏の暑さを忘れて読みふけりました。今回も応募してくださった皆様から、本をとおして多くのことを学ばせていただきました。感謝しております。

稲川 明雄（河井継之助記念館館長）記録誌部門選考委員

短い間に多くの作品を読んだ。すべて、自分の生涯をこの出版にかけたという作品群だ。審査をする委員は、全てを読まないのではないかと懸念された応募者がおられたが、そんなことはない。自分の仕事をかかえながら1日2冊以上読み込むのは、かなりハードな仕事だ。それに差をつけねばならぬという、結果が待っている。毎日、引き受けなければよかつたという後悔に悩まされる。

しかし、読み込むと味が出てきて面白い。写真集や画集もあったが、その画面から伝わってくる作者の思いは千尋の海より深いものがあつた。もと知事さんや市長さんの記録は、近未来に地方分権がクローズアップされると歴史になると思ったし、コツコツと調べ上げた新事実思わず拍手をしたこともあつた。この作品は決して無為なものではないと思ひながら、これは努力賞だな、これは涙なくては読めない賞、あれはよくできた賞などつぶやきながら読みあげる。

そして、最後に選考という試練が待っていて、どうしても心が痛む。そこをぐつとこらえて選んだ後は、また後悔しか残らないのである。

私の立場からいえば、長い間、郷土史、地方史の現場にいた。当然、種々の新潟県の歴史に出会ってきた。史料を基にし、日本史と重ね合わせる作業が面白いので、今までやってきた経緯がある。ところが、その郷土史に人間臭さを入れると内容が濃くなるのが、この審査を通じてわかってきた。1人で書く歴史物より、みんなが描く郷土の過去と未来。そんなテーマに深く感動するようになったのは、この審査に入ってからだと思う。

もとより、新潟県人の実直さには定評がある。直江兼続の義と愛もそうだが、真つすぐ進む実直な人柄が新潟県人の心を培ってきた。決して、派手でなく、嘘をいわず、偽善もせず、まじめに人生を歩んできた人たちの作品に出会うと、しみじみと新潟県に住んでよかつたと思うのである。

大田 朋子（エッセイスト）記録誌部門選考委員

冷夏というのに、私の隠れ家（仕事場）は暑かった。新潟文化祭2009「新潟出版文化賞」の応募作品審査である。一冊ごとにページをめくり、活字と行間から漂う作者の息遣いを感じながら読み進めていくそれは、まさに本との対峙であり、格闘でもあった。

「ほう～、なるほど、へーえ～」と感じ入り「新潟の文化に寄与する作品」、マネこきや自慢こきではなく、「オリジナリティあふれる作品」、そして商業作品とは一味違った自費出版ならではの「作者の心意気」（というと曖昧かもしれないが、私費を投じてもこの思いを世に出したい、との気概）が伝わる作品を選んでいった。

活字好きなこの身にとって、世間からしばし遮断された空間のなか香を焚き、本に囲まれて一人静かな時間を過ごすということは、贅沢な時間であり、しかし、選ぶという行為は、他方を俎上から除くという行為でもあり、正直いって迷いと憂いに揺れる時間でもあった。

数ある力作の中、ひときわ光るといふか、異彩を放つ一冊があった。大賞に選ばれた『芸者から、名歌手へ 小唄勝太郎の生涯』（児玉義男氏）である。

まず本の形態に驚嘆。なんとA4の原稿用紙にそのまま手書きの、まさに「なま原稿」をおそらく複写して製本した手作りのこれぞ自費出版！といった作品である。作者秘蔵のプロマイド(!)等を複写し切り張りし、調べに調べて200ページにひと文字ひと文字綴った大作から、作者の情念と気概が迫ってきた。執筆のきっかけが、勝太郎が母校沼垂小学校にグランドピアノを寄贈したとの新聞記事を目にし、勝太郎のはるかに後輩である作者が同窓生として感動したことによるといふが、それまでファンでもなかった作者に勝太郎の魂が乗り移ったかのように思えてくる。

さて、今回受賞した作品の作者はもちろんのこと、応募されたみなさんの作品を生み出す力と伝える思いをかたちにする力にあらためて拍手をおくりたい。多くの作品との出会いに感謝している。

佐藤 和正（知足美術館副館長）文芸部門選考委員

応募作品がドサッと3回にわたって届けられて、ひたすら読んで、読んで、読みまくった、まさに本との“格闘技”を繰り広げた熱い夏だった。自らの歩みや故郷への深い愛情、地域にどっしりと住み続けた体験を活字で「伝えたい」「残しておきたい」という叫びにも似た〈想い〉の多さに、毎度の事ながら驚かされる。それも地域性、独自性といった個性がとかく希薄になりがちな今の時代に、しっかりとこだわり、自分なりのメッセージを織り込んだ書き手の息使いが読み手に直に伝わってきて、心地よい疲れとして残った。

『芸者から名歌手へ』（児玉義男著）はきわめて貪欲的好奇心で広範囲から資料を手繰り寄せ、構築していったエネルギーに圧倒された。題材が有名人ゆえの関心もあって内容

にもグイグイ引きずり込まれたのはいままでのない。『行商マンが行く』（乙川正純著）はテーマ性をもったパワフルな作品である。文中に「重度脳性マヒ」とある。「親や施設に頼らない生活をしたい」と自立し、電動車イスに自然食品を積んで行商しながら地域の人たちとかかわってきたことを、淡々と書き綴っているところがイイ。人の幸せは人とのつながりによって作られるもので、その日常が“重たく”胸に迫ってきた。第1回で受賞しているが、その後、一段と筆力が蓄えられてきているところが評価されて、今回は選考委員特別賞に。『賀茂の半月』（小川龍著）は江戸時代初期、今生天皇の寵愛を受けていた正五位大納言典侍広橋兼子が若手公家の筆頭、従五位下近衛府少将花山院忠長と無理ない仲となり、密通罪で流罪になった話を取り上げている。密通という男女の最も人間的な深みある題材を正攻法で迫った力作である。欲を言えば、小説としての〈遊び心〉をもっと自在に泳がせてほしいな、と思った。他に『じよんのびよもやま日記』（小林康生著）、『食は新潟にあり』（本間伸夫著）なども心惹かれた。総体的に見て、回を追うごとに“草の根”文化がいかたちで成熟してきているといえる。この賞の存在が地域の中で独自の文化の芽を育てていくより一層の推進力になってほしい。

本間 由美子（フリーライター）文芸部門選考委員

すべての応募作品を読み終わって感じたのは、回を重ねるごとに作品の質が高くなっていることだ。今回もまた素晴らしい作品がそろった。ただそれに伴い、「郷土性」や「自費出版」ならではの持ち味が薄くなっているのも感じた。

その中で、大賞の『芸者から、名歌手へ 小唄勝太郎の生涯』は、郷土の先輩の生き様と当時の名声のすごさを分からせてくれ、「郷土性」が抜きん出ている。この作品は新潟出版文化賞始まって以来、選考委員全員一致での受賞となった。

優秀賞となった『じよんのびよもやま日記』も「郷土性」が高かった。高柳の楮(こうぞ)から作った和綴じ本と作者の文章がぴったりと合い、地域一体となつての本づくりの感があった。ただこのような本を作ろうとすると、かなり高額になると聞いたが、それも自費出版の特権かなと思い推挙した。

それにしてもこの賞がある夏は、これまでは多数の作品を一気に読むため「地獄の夏」だったが、最近では「夏の楽しみ」と思い始めている自分に気付いて驚いている。

若月 忠信（文芸評論家）文芸部門選考委員

前回までは、応募作品を、メモを取りながら、せっせと読んだ。今回は、しみじみと読ませてもらった。読み方の変化というよりは、作品がそうさせたのだ。

本にしたよろこびは、どの作品からも、あふれんばかりに伝わってくる。なぜこれを書いたか、どうして本にしようと思ったかなどの動機は、「あとがき」のところで、控え目ながら、それぞれ個性的に語られている。「あとがき」を、まず読むという選のやり方は、私の好む方法。内容と呼応して、「あとがき」も作品の一部となっていることが多い。

本の装丁も話題になる。工夫のほどこされているもの、紙質や活字や表紙の色調など、出版文化に値するものということになる。

出版文化賞は、だから総合評価。選考委員諸氏の識見によって受賞は決まる。

手元にある私の選考メモを、いくつかあげてみる。これを持参して選考委員会に出席した。

○題名が今風で、親しみとおもしろさを感じさせる。インターネットの楽しみを具体的にみせてくれる。

○ことば学習の本として新鮮。創意工夫がほどこされている。他に発展性のある手本としての意義もある。

○老いが品格よく語られている。日常性のつぶやきが光る。エッセイなら、これだ。

○記録として重要。前回の応募と一緒に読むとすごい迫力。写真が貴重。証言者として説得力がある。

○自分を、人生を肯定的に捉えている。やわらかな詩集。

○大学生向けのテキストとして使える本。

○文章、短歌、川柳を活用しながらまとめた生き方の本。

○ゆったりと余裕の感じられる抒情歌集。

○新潟が、日本の川柳の中心になったと捉えられる証言本。

これらのメモと一緒に、◎、◎、○、△などの記号も付記されている。

